

社会学部論集 第47号 (2008年9月)

## マックス・ヴェーバーとハイデルベルク大学

——人事案件・教育活動・同僚たち—— (9・完)

野 崎 敏 郎

## 〔抄 録〕

ミュンヘン大学において社会学・国家学の体系化をめざしたヴェーバーは、これによって、現実政治社会の諸問題を整序するためのアクチュアルな分析道具を獲得しようとし、また現実政治からの距離を保ちつつ学問世界に沈潜した。最後に本稿の論点をまとめ、大学人としてのヴェーバーの振る舞いを分析するためには独自の視点が必要であるとともに、それを彼の著述活動と関連づけて理解すべきだとした。またアルトホフ体制との関係、ハイデルベルク大学改組改革問題への取り組み、彼による職業活動の自己定位の変化を視野に入れるべきことを強調した。

キーワード ヴェーバー, アルトホフ, ハイデルベルク大学, ドイツの大学行政

## I 序

II 1896年のマックス・ヴェーバー招聘人事をめぐる 【II-1～5〔以上第39号〕II-6・7〔第40号〕】

III 国家学・官房学部門の開講科目とヴェーバー

IV 国家学・官房学部門のスタッフ補強の試み〔以上第41号〕

III (補足・訂正)

V 1900年のカール・ラートゲン招聘人事をめぐる

【V-1～3 (途中まで)〔以上第42号〕V-3 (続)～7〔第43号〕V-8】

VI (幻の) ヴェーバー・ラートゲン体制と1902年の退任 (降格) 願〔以上第44号〕

VII 1902/03年冬学期における復職と1903年の退任 (降格) 願

VIII 1903年のエーベルハルト・ゴートハイン招聘人事をめぐる〔以上第45号〕

IX 正嘱託教授時代 (1903～1919年) のヴェーバー〔第46号〕

## X ミュンヘン時代のヴェーバーとその死

——国家社会学構想・講義遂行・政治——

本稿は、あくまでもハイデルベルク時代のヴェーバーの事績を追ひ、その意味を考証することにその目標を置いており、もともとミュンヘン時代は射程に入っていない。また筆者は、

本稿執筆時点において、まだミュンヘンにおける史料調査をおこなっていないので、ミュンヘン時代の事績については、本稿のこれまでの展開と関連するかぎりにおいてごく簡単にみておくにとどめる。

### X-1 社会学・国家学（国家社会学）構想について

前回みたミュンヘン大学とボン大学との引き抜き競争のなかで、彼は、自分が占めるべきポストは経済学・財政学のポストではなく社会学・国家学のポストであるべきことをしきりに強調していた。マリアンネは、このとき彼が「これらの専門領域〔経済学と財政学〕から逸脱してしまっていた（*er ist diesen Fachdisziplinen entwachsen*）」（LB 1: 657, LB 2: 695）と表現している。そしてこの希望が容れられたからこそミュンヘンに移籍することにした彼は、着任後、その新たな学問構想を新しい職場において具現化しようと試みている。ハイデルベルク大学において構想されていた「一般社会学」講義が、ミュンヘンにおいてはさらに大規模な講義群のかたちをとって展開されていくのであり、その「社会学」は、前回みたゴートハインの1917年10月8日付講義案申請書を敷衍するならば、哲学や宗教史に端的にしめされているヨーロッパ精神文化史の諸問題と関連づけながら、国民経済学・国家学の不可欠な基礎づけをなすものである。この事態は、くヴェーバーにとって社会学・国家学とは何かという問題を考えるさいに重要なことである。

彼は、（遅くとも）1917年以降止むことなく社会学の講義を企画しつづけ、それは最終的にミュンヘン大学において実現する。その内容は、支配論、法論、宗教論を包括し、かつ社会経済史とも関連づけられていた。このうち1920年夏学期の講義は、「一般国家学と政治（国家社会学）」と題され、月・火・木・金曜日各一時間おこなわれた。住谷一彦の紹介によると、「社会学的国家概念」から説きおこされた講義は、国家を目的からではなく手段から定義し、支配の諸類型を解説し、政治権力論を展開した後、レーテ国家にまで説きおよぼはるものであったが、そこまで到達する前に彼は他界する（住谷一彦 1985: 262-267）。この講義案から、彼の講義がバイエルンの現実政治と密接に関連づけられていたことが看取できる。ヴェーバーにとって、社会学的概念構成の援用によって構想される新しい社会科学の課題は、眼前のアクチュアルな政治課題を冷徹に分析することだったのである。ここに、ヴェーバーにとって社会学的分析がもつ意味がある。

ヴェーバーは、専門分科としての「社会学」をアカデミーのなかに組みこもうとしたのではない。むしろ、彼の企図する社会学は、現実の政治・経済・社会・文化の諸問題と緊密に結びあって、その諸問題にかかわる諸現象を歴史的・多角的・包括的に考究し、実践的課題解決に資するように問題を整序するためのアクチュアルな分析道具であった<sup>(1)</sup>。彼は、ミュンヘン大学にたいして（またボン大学にたいしても）、この「社会学」ないし「国家学」を担当する専門教授としてなら赴任するという破格の要求を就任条件として貫徹させ、その結果、「社

会学」ないし「国家学」の名のもとに、従来型の大学の授業とはまったく一線を画する野心的な講義を企て、それを実際に敢行した。そのため、1919～20年に彼がミュンヘンで遂行した講義は、既存の国家経済学部のカリキュラム体系のなかに置くと、どうしてもそこにうまく納まらずに浮いており、なにかヴェーバーが経済学の通常の授業担当を故意に回避しているかのような感を呈していたのである (Lepsius 1977: 110)。

## X-2 講義遂行状況

ヴェーバーの心身は、依然として状態が不安定ながらも、こうした斬新な講義の具体的遂行にどうにか堪えるほどに恢復していた。すでに前年夏学期に、ヴィーン大学で大勢の聴衆を前に講義を敢行していたが、1919年夏学期に、ヴェーバーのミュンヘンにおける最初の講義が開講されたときも、予想外に多くの聴講者が集まって立ち見が出るほどであった。しかもヴェルサイユにおける任務を果たした直後だったこともあって、ヴェーバーはこの講義遂行のために疲弊した。そしてこうした講義負担のために著述活動が滞ることにたいして、彼はかなり苛立っている (LB 1: 676, LB 2: 714-715)。しかしながら、戦後の状況下で通例よりも短縮されたこの学期が終わる頃 (したがって 1919年7～8月頃) には新しい大学の任務に順応するようになり、同年冬学期になると、彼は、大教室を埋めつくす六百人もを学生を前にして「一般社会経済史」講義を展開することができた (LB 1: 683, LB 2: 722)。このとき教室内に滞留している人間の肉体は高い吸音効果を有しており、しかもこの吸音体は、衣服という別の吸音材をも身にまとっている。こうした吸音体が六百個もひしめいているきわめてデッドな音響環境——声が通りにくい最悪の環境——のなかで声を張りあげて講義をおこなうというのは、電氣的拡声手段がなかったことを考えると、健康な話者にとっても重労働である。重い負担感があったにせよ、こうした重労働をこなすことができたのだから、ヴェーバーの講義遂行能力が相当程度回復していたことは明らかである。

ところがその一方で、この当時のゼミ生だったヴィルヘルム・シュティヒヴェーは、この時期のヴェーバーが講義よりも演習に困難を抱えていたと証言している。彼は、講義遂行能力を取りもどしつつある一方で、むしろ演習のほうが神経が疲れるという状態にあったのであり、ここに初期の病状からの変化が認められる (亀嶋庸一編 2005: 57)。また彼は、前述のように、独自の見地から非常に特徴ある講義を展開しているため、従来型の経済学講義はヴァルター・ロッツらに任せてしまうことになり、この同僚に大きな負担を強いていることにたいして負い目を感じてもいる。だからヴェーバーの精神状態は依然として不安定であり、「非常に用心深く生活しなくてはならなかった」 (LB 1: 683, LB 2: 722)。

演習の内容も、ハイデルベルク時代の国民経済学ゼミナールとは大きく異なっていた。1920年夏学期の演習のなかで、彼は、政治的対立について、また正義と不正について議論している (亀嶋庸一編 2005: 55)。すでに前年の講義において社会学的概念論を開陳し、また社会

経済史を概観したあとで、直接にはアルコ事件を契機として、彼は学生たちとともにアクチュアルな現実政治の問題に踏みこんでいる。二十年前の演習授業においては農業政策問題研究と個別の論文指導とが展開されていたのだが、ミュンヘンの演習はそれとはまったく次元の異なるものだったのである。こうした斬新でハードな演習を敢行したことが、演習において神経が疲れるという状態を引きおこしたとも考えられる。

### X-3 現実政治との距離

ミュンヘン時代における政治との係わり（現実政治にたいする基本スタンス）についてみておこう。前回明らかにしたように、1919年6月のミュンヘン大学への隠遁は、この時点におけるヴェーバーの最終的決断ではあったが、彼は、もちろんこれをもって政治との係わりを完全に絶ったわけではない。公の政治活動から撤退しながらも、むしろその後の政情の推移を書斎と教壇からつねに注視しつつ、状況によってはふたたび書斎・教壇を出る可能性を考慮していた。しかし彼が再度政治の場へと打ってでるべき機会は訪れず、翌年の死までの一年間、基本的にミュンヘンの書斎と教室とを往復しつづけた。彼は、政治への関心を失って隠遁したのではなく、つねに政治的発言の機会を窺ってはいたが、その機会をみいだす以前に死去したのである。

このことをしめすのが、彼が亡くなる二カ月前に書かれた書簡である。これは彼が遺した書簡のなかでもっとも遅い時期のもののひとつであり、1920年4月14日の日付をもっている。そのなかで、彼は、「政治家は妥協をなすべきだし、なさなくてはならない。しかし、私は学者を生業としている」と語り、すくなくとも当面、政治的駆け引きや妥協のなかに身を置くつもりがないことを明らかにしている（Frye 1967: 124）。彼は、政治的混沌のなかで翻弄されている人たちを尻目に、この時期にひたすら学問の世界にみずからを限定し集中させようとしていたのである。またちょうどこの頃、演習の第一回開講日に、彼は、シュティヒヴェーラ学生たちにたいして「仕事は学のあるもののシュナップスである」と述べたという（亀嶋庸一編 2005: 58）。ほかの人々が酒を飲んでいても、それに同調せず学者は学問という仕事に邁進すればいいのだというこの言は、政治からの距離を保ちつつ非妥協的に現実社会の分析に向かっていったこの時期の彼のスタンスをよくしめしている。またこうした態度は『職業としての学問』における学者像とも呼応している。

現実政治の動向からみずからを隔離し、また若い世代から——一部の学生たちからは支持されたものの——どちらかという時代遅れの人物とみなされていた彼の孤絶した営みは、1920年6月14日に突然絶たれた。彼の取りくんでいた科学と政治の問題は、彼が懸念したように、その後ますます大きな困難を抱えこみ、混迷を深めていく。そして百年近く経過した今日において、現代の科学と政治の問題を考えるうえで、なおヴェーバーを読むことがアクチュアルでありつづけている。

〔注〕

- (1) この論点にかんしては折原浩の論及が重要である(折原浩 2003, 同 2007)。

## **XI ドイツの社会科学的研究と大学とヴェーバー——いくつかの問題群——**

本稿は、偶然の史料発見を契機としており、もともと確たる問題意識のもとで書きはじめたものではないが、書きすすめるうち、今後われわれ研究者が取りくむべき問題群に突きあたることになった。そのいくつかを列記しておく。

### **XI-1 人事案件分析の視点**

本稿であつかったような人事案件を検討するさいには、それにおうじた分析視点を立てなくてはならない。とりわけ、次の——いずれもみすごされがちな——四つの点に留意することが肝要である。

第一に、人事はつねにその時点におけるさまざまな付帯事情によって大きく左右される。もとより歴史現象はつねにそのようなものだが、人事案件にあっては、一般的付置連関を押しつけて、偶発的事象が決定的な役割を果たしていることがじつに多い。マールブルクにおける反シュモラー派との確執からハイデルベルクへの移籍を画策したラートゲンの例はその最たるものだが、人事事象はこうした一回性に大きな特徴がある。したがって、ひとつひとつの人事を個別的具体的歴史事例として分析し、その時点を明らかにすることに徹するのが基本中の基本である。また人事は人間関係に大きく左右されるが、その人間関係は突然大きく転回・変質することがしばしばあるから、後年の人間関係から類推的に遡行しようとする、その人事の時点における人間関係を見誤る危険性が高い。とくにヴェーバーの場合、相手がトレルチであれリッケルトであれ弟アルフレートであれ、特定の人物と生涯を通じて良好な人間関係を保っていたためしがほとんどなく、またハイデルベルク大学哲学部国家学・官房学部門のスタッフであるレーザー、キンダーマン、シェラーとの関係も単純でない。したがって、それぞれの人事案件においてどのような協力または対立関係が形成されていたのかについては、後年の人間関係に引きずられることなく、ケース・バイ・ケースで慎重に検討しなくてはならない。

第二に、このこととかわかって、学問上または社会政策上の鋭い意見対立がある間柄であっても、人事戦略上では結束・結託することがある。また逆に、学問上または社会政策上の違いがさほど認められない間柄であっても、人事選考の特定の局面において激しく対立することもある。こうした対立図式を考慮に入れなくてはならない。

シュモラーと社会政策学会の他の会員たちとは、さまざまな問題をめぐって激しい対立関係に立つことがあるが、若手の人事にかんするかぎり、よく団結し協力しあっている。シュモラーらにとって、主要な敵は自由主義経済学者たち(いわゆるドイツ・マンチェスター派)をは

はじめとする反シュモラー派であって、反シュモラー派が押さえている教授ポストを奪いとり、社会政策学会の有能な若手にそのポストを与えることにかんしては、シュモラーもヴァーグナーも手を携えて尽力している。人事は、ある程度まではマンチェスター派にたいする陣取り戦なのである。

こうした観点に立つときにはじめて、けっしてシュモラーの「子飼い」の若手ではないヴェーバーにかかわる人事において、ヴェーバーが、最終的にフライブルクやハイデルベルクの地位を獲得できた事情が整合的に理解できる。反シュモラー派の占めていたポストを奪って、それを社会政策学会の期待の若手ヴェーバーに与えるかぎりにおいては、ヴェーバーとシュモラーの利害は一致するのである。フライブルクにおけるヴェーバーの前任者はフィリップヴィチであり、ハイデルベルク大学における前任者はクニースである。フィリップヴィチは、フライブルクを去るにあたり、自分の後任としてシュモラーに近い人物をも考慮に入れているから、「反シュモラー派」とまでは言えないだろうが、クニースは、シュモラーらの動きにたいしてははっきりと反対側に立っている。人事過程を考察するさいには、こうした人脈配置図と、それにたいするシュモラーやアルトホフの側からの切り崩し作戦とをつねに顧慮する必要がある。じつに人事は政治である。

もちろん、具体的に若手のうちの誰をそのポストに据えるのかという局面において、たとえばシュモラーとヴァーグナーとの間で意見の違いが顕在化することもある。ある人事選考にかんして、ヴァーグナーは、ある若手研究者を、シュモラーとの関係が深いにもかかわらずシュモラー一辺倒でないとして高く評価している（Rubner 1978: 270）。こうした発言は、ヴァーグナーのスタンスを考えるうえで示唆に富む。

第三に、人事権は政府にあり、ヴェーバーが勤務したフライブルク大学とハイデルベルク大学はバーデンの大学だから、バーデンの文部官僚（つまり非専門家）が人事権を掌握していることを忘れてはならない。この点を顧慮すると、とくに候補者の選定の局面を考察するさいに、今日の（つまり後世の）研究者からみて各候補者の業績や教育活動がどうみえるのかという見地を持ちこむのは危険である。むしろ、その当時、その候補者が一般にどのようにみられていたのか（風評）、またバーデン政府からみてどのように映っていたのか（官僚の視点）が重要である。というのは、そうした風評を参照しつつ、官僚側の人物考査——むしろ「品定め」と呼ぶべきか——によって教授が任命されているからである。ある研究者にかんして否定的な風評が立てば、その真偽にかかわらず、その風評は、官僚による人物考査にさいして非常に不利に働く。

たとえば、ハインリヒ・ヘルクナーがトントントン拍子で就職・昇任の階段を上がっていく一方で、ヴェルナー・ゾンバルトは幾度となく苦杯を嘗めさせられている。これは、こうした官僚側からみた人物像の差異によるところが大きいように感じられる。本稿でみたように、アルトホフは、ゾンバルトにたいして和解不可能な対立感情を抱くようになっており、その歪んだゾ

ンバルト観をバーデンの文部官僚にも吹きこみ、ゾンバルト人事を遮二無二潰しにかかっているのである。

第四に、いわゆる「アルトホフ体制」にあつては、各国の文部官僚たちが緊密に連絡を取りあい、また一種のカルテルを結成しており、そのなかでたしかにアルトホフの意向が全ドイツに徹底されていくのだが、個々の局面においては、各国間で緊張関係が生ずることもある。1893年秋のヴェーバーのフライブルク招聘案件におけるバーデンとプロイセンとの確執がそうである。そこにおいては、ヴェーバーをベルリンに引きとめようとするアルトホフと、彼をフライブルクに引きぬこうとするバーデンのアルンスペルガーとの確執が顕在化している<sup>(1)</sup>。ところがその一方で、アルンスペルガーは、自分の息子の就職の件など、アルトホフにはずいぶん世話になっているのであり、遺されているアルンスペルガーのアルトホフ宛書簡は、プロイセンの局長への感謝と賛辞で埋められている<sup>(2)</sup>。官僚間の人間関係とはそうしたものののだろうか、同調し、アルトホフのご機嫌を伺い、プロイセンの優先権を表面上は保ちつつも、各国の文部官僚間の競争意識は強かったと思われる。

#### **XI-2 ヴェーバーのハイデルベルク大学招聘の意味**

ヴェーバーのハイデルベルク大学への招聘は、十九世紀末における経済学者の世代交代の象徴的事例であった。前任者であるクニースが、後任として哲学部が推挙したクナップ、ビューヒャー、ヴェーバーを激しく罵ったことについてはすでに述べた。いわゆる旧歴史学派と新歴史学派との関係は、どちらかという、「新」の側からみて「旧」をどう批判しどう克服したかという文脈で語られることが多かったと思われるが、本稿であつかった事例は、「旧」の側から「新」をどうみていたのかをしめす貴重な例である。この点について、いくらか敷衍しておこう。

ブルーノ・ヒルデブラント (1812-78) は、スミスの自由放任思想から離脱するとともに、逆に社会構成員の経済・社会生活にたいする国家の全面的干渉を企てたビスマルクの政策にも反対し、そのため孤高の地位を保った (橋本昭一 1975: 187)。その彼は、シュモラーやヴァーグナーとのあいだに一定の距離を置いたが、しかしクニースほど激しく彼らに敵対したわけではなかった。

一方、ヴィルヘルム・ロッシャー (1817-94) は、1888年10月28日付シュモラー宛書簡において、「貴殿の〔これまでの小生にたいする〕非難を、小生はすべてまったく理由のあるものと考えます」と書き、シュモラーの将来を祝福している<sup>(3)</sup>。これは、祝賀会出席者への礼状に添えられた文章なので、その内容は、額面通りではなくかなり差しひいて理解すべきだろう。また、人生の最終局面に差しかったロッシャーが、シュモラーとの関係を良好なものに落ちつかせたいという心情を抱いているという事情も勘案する必要がある。しかしそれでも、この書簡から、ロッシャーが、シュモラーの今後の活動にたいして大きな期待を寄せてい

ることをみてとることができる。

このようにみえてみると、旧歴史学派の次世代への態度は三者三様である。とくに、シュモラーにたいしてかなり屈折した態度をとっているヒルデブラントやロッシャーにたいして、後進世代にたいするクニースの態度はいちじるしく硬直しており、またきわだって敵対的であるのが目立つ。もちろん、本稿で紹介した事例は、クニースの後任人事でありながら、ハイデルベルク大学哲学部がクニースを排除したまま人選をすすめているという異常事態のなかで彼が激怒しているという脈絡のなかで理解しなくてはならない。彼がクナップ、ビューヒャー、ヴェーバーにたいして過度の敵愾心を燃やしているのはこのためである。しかしこの激情に駆られたクニースの振る舞いから、彼が後進世代に完全に背を向けていることがわかる。この点が、ヒルデブラントやロッシャーと大きく異なる点である。

一方では、クニースのポストを新たな学部構想の用に供するべくハイデルベルク大学哲学部およびイエリネクが気鋭の経済学者を招こうと腐心し、また一方では、クニースのポストを奪いとるべく陣取り戦を企てたシュモラー、ヴァーグナー、アルトホフが人事戦略を展開し、その両者の利害が一致した地点にヴェーバーがいたのである。つまりヴェーバーは、ハイデルベルク大学に着任するとき、新しい経済学・政策学の展開によって学部の刷新を志向する潮流に合流するとともに、——フライブルク人事の一件にみるアルトホフとの激しい対立にもかかわらず——シュモラー・アルトホフ体制の枠内でキャリア・アップを果たしたことになるのである——このことを当時のヴェーバーがどの程度自覚していたのかは留保するとして——。この意味では、ヴェーバーのハイデルベルク招聘は、ドイツの大学経済学をどのように刷新するのかのテストケースであるとともに、彼が、マンチェスター派と旧歴史学派という二つの敵を掃討するための駒のひとつとみなされていたことを明示している。

本稿でみた1900年人事、1903年人事は、こうした裏事情を（うすうす）察知したヴェーバーが、それに対抗して、望ましい大学人事のありかたを追求したケーススタディとして理解するのが適切であろう。そこにおいては、さまざまな思惑を——じつにヴェーバー自身の思惑をも——排して、各候補者の研究能力と教育能力を冷徹かつ総合的に判断し、また候補者の年齢差を考慮して公平性を保ち、かつ大学教員にたいする思想審査を峻拒し、人事権を掌握するバーデン政府を望ましい方向へと導こうとする強い意志が貫かれている。

1896年のヴェーバー招聘人事は、ハイデルベルク大学の改組改革問題にかかわる哲学部内の（また法学部をも巻きこんだ）対立がその重要な規定要因になっている。その招聘事情からして、この人事によって選任されたヴェーバーは、同大学における国民経済学部門改革に積極的に関与することをつよく期待されていた。彼は、すでにフライブルク大学において国民経済学部門の改組（哲学部から法学部への移管）をなした実績を有しており<sup>(4)</sup>、ハイデルベルク移籍後も、哲学部の同僚たちおよびイエリネクと協力しつつ、学部改組拡充の方向を探っている。こうした大学組織内におけるヴェーバーの活動については、管見のかぎりではヴェーバー



研究者たちの視野に入っていなかったと思われる。しかし大学における経済学・財政学領域の充実(ないし刷新)は、当然にもドイツの国家・経済発展にとって重要な意義を有しており、この方面におけるヴェーバーの努力は、大学の将来像とともにドイツの将来像ともかかわっているのです、ここには今後われわれ研究者が考究すべき課題が含まれている。

### XI-3 アルトホフ体制のなかの苦闘

本稿において分析した大学人事は、しばしば——あるいはむしろほとんどつねに——大きな困難に直面している。こうした困難は、ヴェーバー自身が「アルトホフ体制」と呼んだ文部官僚制と大学組織運営との癒着関係に起因するところが大きい。ヴェーバーは、その問題構造を肌で感じ、アルトホフの牛耳るプロイセンから脱出し、バーデンの自由な空気を吸った<sup>(5)</sup>。ところが、その後バーデンの文部行政もアルトホフ支配に組みこまれ、アルトホフを頂点とするドイツ大学のカルテルが形成される。その過程において、バーデン側がいかにアルトホフ体制に呑みこまれていくのかを如実にしめすのが、本稿でみてきた人事事例である。

1900年人事においては、シュトラースブルク時代からアルトホフと親しい関係にあったラートゲンによる裏工作が展開されており、1902年のカールスルーエ工科大学人事では、アルトホフが直接介入してゾンバルト招聘が阻止された。1903年人事でハイデルベルクに招聘されたのは、アルトホフとの訣別にいたったゴートハインであった。アルトホフ体制下のさまざまな問題が、こうした事例において噴出している。こうして、かつてヴェーバーがやってきた1894年当時を感じられたバーデンの自由な空気は、その後十年間で急速に汚染がすすみ、もはや澄んだものではなくなったのである。

前述のように、もともと、プロイセンのアルトホフとバーデンの大学行政担当官とのあいだには長年にわたる確執があるため、両者間にはしばしば軋みが生じているが、最終的には——ときにはアルトホフの強権発動をとめないながら——アルトホフの意向が貫徹されていく。したがって、文部官僚対大学教授陣という対立構図だけでなく、文部官僚間の対立構図をも視野に入れないと、アルトホフ体制の全体像はみえてこない。この後者の視点が、従来の研究にあってはたいへん弱かったのです、本稿においては、バーデン法務・文部省の内部文書を使って、プロイセン・バーデン間の緊張関係を浮きたてせることに努めた。

本稿でみてきたいいくつかの大学人事事例は、ハイデルベルク大学哲学部の改革と係わっており、それは、ドイツ各地の大学改革問題——とりわけ各大学哲学部の再編問題——と共通して、自然科学にたいして文化科学をどう再定義するかという問題に通じている。そしてその改革・再編をすすめるためには、ドイツ各国の文部行政担当省の合意を取りつけなくてはならず、とりわけ各国の産業化・経済発展に寄与する部門を哲学部内に設置するか、あるいは他の形態でこうした部門を学内に組みこみ、また強化するという方向が有効であった。しかしこうした改組・改革は、当然にも担当省の介入を不可避とするから、アルトホフによって方向づけ

られた文部行政担当省による大学支配を助長しかねないという緊張をも孕んでいる。

ヴェーバーによるアルトホフ批判は、すでに上山安敏らの詳細な研究によって知られているが（上山安敏他編訳 1979）、筆者がひとつ注目するのは、ヴェーバーが、その批判にさいして、ハイデルベルクにおける人事例をあげつらっていないことである。ヴェーバーのフライブルク人事のみならず、ハイデルベルク大学の各人事にたいして、アルトホフはつねに露骨な介入を企てているのだが、ヴェーバーは、それを察知していなかったか、あるいはうすうす知っていてもなおバーデンの文部官僚を信用していたか、どちらかであろう。

アルトホフは1907年9月30日をもって退任する。彼は、退任直前の時期に、ゾンバルトのベルリン商科大学への招聘、ラートゲンのハンブルク拓殖研究院への招聘、ゴートハインの同学院への招聘（辞退）、アルフレート・ヴェーバーのハイデルベルク大学への招聘等にも関与したのではないかと推察される。同じ1907年にはアルンスベルガーが亡くなっており、ヴェーバーらを翻弄した二人のライバル関係はこの年に終わりを告げた。したがって、この1907年を画期として、〈アルトホフのアルトホフ体制〉と〈アルトホフなきアルトホフ体制〉とを分けて考えなくてはならない。アルトホフ個人は、ある種のカリスマとして、その低い職位にかかわらず、プロイセンのみならずドイツ全土の大学人事に絶大な発言権・決定権を保有しつづけた。彼個人についてみると、その人物評価の異常なまでの厳密性・即物性——とりわけ辛辣な人物評価——、各大学にたいするプロイセン文部省の優位の確保、各国文部行政担当省間の確執の調整と他国の省を屈服させていく手腕、ユダヤ人であろうとカトリックであろうとプロイセンのために有用な人材なら大胆に登用・重用する開明性——こうした諸点で傑出していたことは疑いなく、〈アルトホフのアルトホフ体制〉は、見識あるアカデミー・カリスマの独裁だったと評価できる。むしろユダヤ人排斥等は各大学教授陣のほうが露骨だったのであり、この点から、ヴェーバーがしばしばアルトホフを高く評価しているのはけっして遁辞ではないことに注意しなくてはならない。

しかし、カリスマが引退して以後になると、アルトホフの築いた官僚支配体制のうえに乗って、凡庸な文部官僚が跋扈することになった。ヴェーバーが、大学教員会議等の機会において、ドイツの大学問題にかんして旺盛な発言を展開したのが、とりわけアルトホフ以後の時期に集中しているのは、〈アルトホフなきアルトホフ体制〉がいかなる逆機能を発揮するのかを懸念したためにほかならない。だからこの時期のヴェーバーは、アルトホフが築いた体制の問題と、そのうえに安閑として乗っている虚ろなエピソード・官僚の問題とを抱き合わせにして批判するというスタンスをとっているのであって、彼にとって、この問題は官僚制論の重要な論点を構成するものであった。

このように、ヴェーバーのアルトホフ批判には、一面ではアルトホフ評価も含まれているので、一見するとわかりにくさがまわりついている。しかし——いまここで詳論する余裕がないが——そのわかりにくさのなかに、大学行政はどうあるべきか、それにたいして大学教授は

どうあるべきか、またいかにして学問的後継者を育成するかを考えるうえで重要な論点が含まれているのである。

したがって、われわれ研究者は、ヴェーバーの大学論を一筋縄で括ることができないということを念頭に置いて、彼の立論を理解しなくてはならない。あらかじめなんらかの枠を——たとえば大学の「民主化」といった枠を——設定し、そこにヴェーバーの「アルトホフ観」を嵌めこもうとすると、ヴェーバーはつねにその枠の外にいる。またヴェーバーは、大学や大学行政にかんして総論的体系的な評論をしているのではなく、その時々大学の情勢に即応したアクチュアルな発言に徹しているので、軽率な読者は——その当時の読者でさえ——彼の言の真意を測りかねる場合がある。さまざまな言行録から、大学問題にかんするヴェーバーの発言の断片を集め、それを——その置かれていた時代的ないし状況的文脈を無視して——継ぎあわせるのは危険である。そこに出現する寄せ木細工のヴェーバー論は、おそらく、壮麗に空洞化・硬直化した似而非ヴェーバー像を捏造するか、彼の個々の発言の意図を取りあぐねて精緻に瘦せおとろえていくかどちらかである。

アルトホフ体制にたいするヴェーバーの評価、大学の変貌にたいする彼の評価、その大学のなかにいる大学教員のありかたをめぐる彼の批評は、けっして単純ではない。教授会の自治や若手研究者の意向・動向にたいしても、彼はそれぞれ批判的である。そして、大学の官僚制化のなかで、大学教員はどうあるべきか、大学組織論と学者資質論との統一はいかにして可能かといった問題を考えるうえで、ヴェーバーの大学論はいまもアクチュアルである<sup>(6)</sup>。

#### XI-4 病状推移およびヴェーバーによる職業活動の自己定位の変化

ハイデルベルク大学において精力的に教育活動を開始するとともに、哲学部ないし国家学・官房学部門の改組拡充のために、学部同僚や、この部門を他学部から支えていたイエリネクと協力していたヴェーバーは、赴任後まもなく心身の変調を愁訴しはじめ、講義の短縮や転地療養を余儀なくされる。もともと彼が同大学に転じたのは——彼自身の意図としては——政治活動から撤退するためでもあったので、この（フライブルクからハイデルベルクへの）移籍そのものが、彼の活動スタンスの変更を含意していたのだが、今度は、発病という予期しない要因によって、ハイデルベルク大学における自分の教育・研究活動のありかたを変更せざるをえなくなったのである。そうした活動スタンスの変更は、その後もミュンヘン大学への移籍まで何度か軌道修正のうえ続けられているが、従来はこの変化・変更について十分認識されていたとは言えない。その軌道修正は、そのつど、ヴェーバーにとって、学問と政治、あるいは大学と文部官僚制をめぐる諸問題を認識する重要な契機であり、また当時の政情の変化や体制変動のなかで大学人はどのようにあるべきかという問題にも連なっている。

彼の大学人としての活動の主要拠点となったのは、あらためて言うまでもなくハイデルベルクであった。彼の生涯のなかで、ハイデルベルク大学時代はことのほか重要な意味を有してい

る。ところが、奇妙なことに、そもそも「ハイデルベルク大学時代」とはいつからいつまでなのかまったく知られていない。ほとんどの人は、ヴェーバーは1903年にハイデルベルク大学を退職し、その後もハイデルベルクに住んではいたが、1918年春にヴィーン大学で教壇に立つまでは大学の職務から離れていたと思いこんできた。そのなかにあつて、ひとりダグマル・ドリュルだけは、独自の史料調査によって、ヴェーバーのハイデルベルク大学在職期間を「1897～1918年」と推定した（Drüll 1986: 288）。しかし前回解明したように、これも正確でなかった。じつに驚いたことに、ヴェーバーの生涯について多くの人が関心をもち、また膨大な数の伝記記述がなされてきたのに、ヴェーバーがハイデルベルク大学からいつ退職したのかは、これまで研究者のなかで誰一人知らなかったのである。

筆者が発見したいいくつかの書簡や教務・人事関連資料は、ヴェーバーがこの大学から退職したのが1919年6月であることをはっきりとしめしている。彼の退職がこの時点であることにかんして、筆者が確認できた第一次史料すべてが完全に一致している。とりわけヴェーバー自身がこの時点で退職することを書簡中で明言しており、ハイデルベルク大学哲学部もその旨を諒承してこの書簡を学部教授間で回覧している。またヴェーバーからの通知にもとづいて、大学事務局は、彼の名を6月以降に教員名簿から抹消している。ヴェーバーは、バーデン文部省にもこの時点で退職通知を提出している。ヴェーバー本人も、哲学部教授陣も、大学事務局も、バーデン政府も、彼が1919年6月に退職したことについて一致した認識をもっているのである。したがって、彼がこの大学に（1897年4月から1919年6月までの）二十二年強勤務していたことを疑う余地はない。その二十二年間は、彼の研究活動においてもっとも豊饒な日々であり、学生たちにたいする懇切な研究指導という点においても、またハイデルベルク大学正嘱託教授に配置替えされてからの旺盛な政治活動をみても特筆すべきものがある。ヴェーバーのハイデルベルク大学における二十二年間は、研究と教育と政治の三つの領域における苦闘と結実と挫折の日々であった。

従来の研究にあつては、1903年から1919年までの彼が依然としてハイデルベルク大学の現職教員であったという事実が見過ごされていたため、研究と教育と政治という彼の活動の三つの構成部分のうち、「教育」の側面が見落とされがちであった。そして残る「研究」と「政治」について考えてみると、彼は最後まで職業的政治家にはならなかったので、1903年秋以降の彼の職業はもっぱら学問的文筆業ないし雑誌編集者だと一般に認定されてきた。

ところが、職業人としての彼自身は、みずからを、たんに研究するだけの学者として規定していたのではない。講義・学生指導・大学運営は、彼にとってつねに職業上の重要任務でありつづけた。たしかに、1903年秋以降、彼はハイデルベルク大学から一マルクの俸給も受けとることはなかった。それどころか、通常の正教授退任の手続きをとれば当然年金を受給する資格があるのに、彼は非妥協的な態度でこれを固辞し、これ以降無給・無年金のまま十五年半ハイデルベルク大学に奉職しつづけた。そしてその間、大学関係では、ヴィーン大学から講義報

酬を受けとっただけであった。しかしそれでもなお、ハイデルベルク大学における職務は、1903年秋以降も彼にはっきりと自己の責務として認識されていたのである。

こうした事実は、ヴェーバーの大学論・職業論と彼自身の職業活動との関連づけをなすさいにきわめて重要である。従来、ヴェーバーは1903年秋に大学を退職したと思いこまれていたため、その後の大学論・大学行政批判・学問論は、大学から離れた人物による外部からの発言だとみなされてきた。しかし事実はそうでなく、それは大学内部にとどまっている人物によるアクチュアルな議論であり、そのアルトホフ体制批判は一種の内部告発だったのである。

ヴェーバーは、1892年春にベルリン大学の教壇に立って以来、亡くなるその瞬間まで、さまざまな紆余曲折はありながらも、間断なく大学に奉職しつづけたのであって、彼はこの間一瞬たりとも大学職を離れたことはなかった。しかも彼は、大学に職を置く者としての自覚を、亡くなるまで一瞬たりとも弱めたことはなかった。だからわれわれ研究者は、彼の後半生を、かならず職業人たる大学人の歩みとして位置づけなくてはならない。しかしこの観点は、従来の研究には決定的に欠落していた。そのため、本稿の後半部分の主眼は、大学人ヴェーバーの職業活動の具体的展開およびその活動の彼自身による定位を解明することに向けられることになったのである。

#### XI-5 大学人ヴェーバーの実像把握のために

本稿において〈ヴェーバーと大学〉という視点を設定するさい、とくに重視したのは、大学人としての存立形態が、研究者・著者としての存立形態といちじるしく性格を異にしている点である。われわれは、なによりもまず彼の著作によって彼を知っているが、その著作において立ちあらわれている彼の姿と、大学に勤務している彼の姿とは、かなり異なっている。これは以下の第一点・第二点にまとめられる。また本稿独自の視点は、筆者自身のヴェーバーにたいする研究アプローチがヴェーバーそのものに向けられていないことと係わっている。これは第三点にまとめられる。

第一に、彼を大学組織や教授団の一構成員として位置づけることが重要である。研究者としての彼は、その著作を完全にわがものとして構成し、またそれを——紙幅等の理由からやむをえない省略などはあっても——わがものとして刊行できるが、大学人としての彼は、政府・大学・学部の意向を無視しては何事をもなしえない。また彼はつねに学生の利益を考慮して行動している。だから、大学人ヴェーバーを、周囲の人々の意向に大きく制約された姿として描かなくてはならない。

第二に、本稿においては、ヴェーバーを主体としてよりもむしろつとめて客体として捉えようとした。精神神経疾患に由来するさまざまな不可抗力が働き、そのため彼は自分の身の振りかたを変更することを余儀なくされている。またバーデン政府関係者やアルトホフの意向が、ハイデルベルク大学哲学部国家学・官房学部門のありかたに決定的な影響を及ぼしており、ヴ

ヴェーバーといえどもそれに抗する手段をもっていない。疾患のために不本意な決定を甘受せざるをえないという側面、また権力を掌握していないために要求を貫徹できないという側面をきちんとみることが、大学人ヴェーバーの実像に迫るためにどうしても必要なことである。

第三に、ドイツの大学にとってヴェーバーとはどのような存在であったかを解明することが、本稿において筆者の目標とするところであって、ヴェーバーにとって大学とはどのような存在であったかを解明することは、筆者にとって副次的課題であるにすぎない。もちろん、ハイデルベルク大学、ヴィーン大学、ボン大学、ミュンヘン大学のなかにヴェーバーは自分をどのように位置づけようとしたかという点においてはヴェーバーに内在しつつも、最終的には明確に外在的なヴェーバー研究をめざしているのです。本稿において展開してきた議論は、専門的ヴェーバー研究であるよりは、大学研究・知識人研究の枠組のなかで、ヴェーバーという一人の人物に焦点を当てた研究の一環である。言いかえると、ヴェーバーを理解するためのヴェーバー研究であるよりは、ヴェーバーを通じてドイツ知識社会を理解するためのヴェーバー研究である。そしてこうした研究は、もちろん筆者のめざしている第二帝政期ドイツ知識社会論にとって有益であるが、それとともに、本報告書において展開している議論やそこにおいて提示している新史料は、専門的ヴェーバー研究にとっても有益であろう。

こうした三つの視点を踏まえて、さらにもうひとつ重要な課題となるのは、彼の教育活動と研究活動とを——あるいは大学人としての彼と著述家としての彼とを——統一的に把握することである。ハイデルベルク大学社会学講義案作成、ヴィーン大学講義、ミュンヘン大学講義は、いわゆる『経済と社会』の大戦前草稿から死の直前における刷新稿への発展途上になされており、このうちミュンヘンの「経済史」講義ノートのみは早い時期に整理・公刊され翻訳もなされたが、他の講義録の公刊によって、彼の講義活動の全骨格を明らかにすることができるならば、彼の学問体系が最終的にどのようなかたちになるはずだったかを知る重要な手がかりになるであろう<sup>(7)</sup>。さらに、そうした教壇上の活動のみならず、本稿であつかった教授組織内部における彼の活動が、彼の大学論と密接不可分に関連していることにも着目しなくてはならない。大学人としての彼の振る舞いと彼の大学批判とを、言行一致の問題として検討することも、今後の大学人ヴェーバー研究には必要になるのである——部分的には本稿中ですでにそれをなしているが——。

〔注〕

- (1) これについては別のところで分析した（野崎敏郎 2005: 190–194）。
- (2) この書簡のなかには、フライブルクに移ろうとするヴェーバーを引きとめるための小道具としてアルトホフが利用した重要書簡も含まれており、いずれ別の機会に紹介・分析するつもりである。
- (3) GStAPK, VI. HA, N1 Schmoller, Nr. 181 Allgemeine Korrespondenz 1888, Nr. 7–8.
- (4) フライブルク大学の改組問題については、すでに別のところでその概略をしめしておいた（野崎敏郎 2005: 194–195）。

- (5) 1893年10月25日付アルトホフ宛書簡によると、このとき、ベルリン大学法学部（学部長グナイスト）をはじめとする法学界ないし法学者たちの人事利権争いに失望したことが、ヴェーバーがプロイセンからの離脱を図ったもっとも直接の理由らしい（GStAPK, VI. HA, NI Althoff B. Nr. 194, Bd. 2, Nr. 38-39）。
- (6) 時代と状況のなかのヴェーバー像を確認したうえで、大学や大学行政にかかわる彼の立論を理解するという点において、彼の大学論に付せられた上山安敏の解説はいまなお非常に優れている（上山安敏他編訳 1979: 153-219）。
- (7) ハイデルベルク大学における1897/98年冬学期の「農業政策」講義にかんしては、受講したエルゼ・リヒトホルフェンによる筆記ノートが遺されており、これは『ヴェーバー全集』に収録される予定である。またミュンヘンにおける講義筆記録のいくつかも全集収録が予定されている。こうした講義ノートの一部は、すでに住谷一彦によって紹介され検討されている（住谷一彦 1974, 同 1985）。

## XII おわりに——ヴェーバーの伝記的研究の刷新に向けて——

本稿において、ヴェーバーとハイデルベルク大学とをめぐるさまざまな問題を検討してきた結果、大学人としての彼の歩みは、彼の大学論と密接な関連を有しているのみならず、それは彼の研究活動・政治活動全般とも密接不可分に結びついていることが判明した。ところが、彼の大学における活動は、これまで研究者のあいだでもあまり知られていなかった。それは、主として、彼にかんする主要な伝記資料のなかに、大学人ヴェーバーにかんするものがすくなかったからである。数少ない例外としてはホーニヒスハイムの回想録（Honigsheim 1963）が貴重だが、そこには多くの不備・誤認が含まれているため、うかつに引用できないという難点があった。本稿においては、つねに第一次史料と突きあわせながら、なるべくホーニヒスハイム自身の体験にもとづく記述のみを拾うという方針で、これを活用してきた。今後もこの回想録の批判的摂取が重要になることであろう。

これにたいして、本稿で随時指摘してきたように、マリアンネの記述には筋の通らない点が多々あり、とりわけ大学組織にかんする彼女の無知に起因する誤認が目につく。妻としての見聞の限界と、彼女が描こうとしたヴェーバー像の恣意性とをわれわれは認識すべきである。すくなくとも、〈大学とヴェーバー〉という問題群について考察しようとするとき、彼女の記述はあまり役に立たないことが、本稿の執筆過程においてわかってきた。本稿においては、ヴェーバーのハイデルベルク大学を中心とした活動を、1896年から1903年まで、また1916年から1919年まで、第一次史料に依拠して辿ってきたのであるが、これだけの期間の出来事にかんしても、マリアンネの記述中に大きな不備をいくつもみいだした<sup>(1)</sup>。もしもヴェーバーの生涯全体にわたって厳密な史料研究を貫徹させ、精密なライフヒストリーを構築できたならば、そこに浮かびあがるヴェーバー像は、マリアンネのそれとは似ても似つかぬものになる可能性がある<sup>(2)</sup>。

彼女による伝記が、今後もヴェーバーの生涯を検討するための重要な資料であることはたし

かだが、そもそも、近親者による伝記記述をうかつに信用してはならず、かならず第一次史料との突き合わせをしなくてはならないというのが歴史研究の常識である。それにもかかわらず、これまで、各国のヴェーバー研究者たちの多くは、マリアンネの記述にあまりにも全面的に——したがってまた無批判に——依拠してヴェーバー像を描こうとしてきた。ミッツマンや安藤英治は、彼女の記述にたいする批判的検討を部分的に企てたが、かならずしも成功しなかった。こうした不備を克服するのはいまや急務である。現時点で、筆者は、マリアンネによる伝記は一種の伝記文学作品と位置づけるのが妥当だと考えている。彼女の記述中では、彼女自身の主観とヴェーバーの主観とが混同され一体化されているからである（たとえば本稿（4）：49-50）。

今日、ヴェーバーの伝記的研究は、マリアンネの構成した神話的ヴェーバー像に囚われた段階から脱し、実証的段階に入らなくてはならない。こうした研究にあっては、彼の足跡にかんする各種資料——もちろんそのなかにはマリアンネによる伝記も含まれている——を大量に集め、そのなかで信頼できる第一次史料を最重要視しつつ、他の資料をそれと照合していくことが不可欠である。関係者がみずからの記憶にもとづいて書いた記録を参照するときには、その記憶がどうしても一面的かつ不確かなものであり、そこから各関係者が引きだしている判断もまた一面的で不確かなものであるから、第一次史料に照らして慎重にかつ批判的に吟味しなくてはならない。したがって、マリアンネによる伝記は、ホーニヒスハイム他の回想録と同様、あくまでも副次的な資料のひとつであるにとどまる<sup>(3)</sup>。こうした資料蒐集や照合作業なしに彼女の記述を引用すると、事実誤認をする危険性が高く、現に誤認を招いている。本稿を書いていてそうした誤認のいくつかに気づいたのも、この照合作業を通じてであり、照合したうえであらためてマリアンネの記述を読むと、なるほどまちがったことを書いているわけではないことがようやくわかるが、マリアンネの記述だけを読むとどうしても誤認してしまうというケースが多いのである。

＊

＊

もともと本稿は、筆者が別件の調査をしているさいに、偶然、1896年のヴェーバー招聘人事書類に遭遇したことに端を発している。このとき、こうした重要な事実は、できるだけすみやかに多くの研究者に知らせるべきだと考え、急遽論文化することに決めたところから本稿は生まれた。四年半にわたるこの連載の途上では数多くの新史料に遭遇し、そのつど軌道修正を余儀なくされた。しかも論ずべき問題が広範にわたるため、記述が錯綜し、またこの先何年連載を続けなくてはならないのか見当がつかなくなった。一方、本稿執筆のために、現在筆者が抱えている他の研究課題の考究が滞りがちであり、さらにこの原稿が刊行される時点で筆者が在外研究に入っているという事情もあるため、本稿をひとまずこれで閉じることにしたい。自転車操業で書きついできたので、史料調査が原稿に追いつかないこともあり、あとで不備に気づくこともあったが、在外研究中にできるかぎりこれを補い、補充・整理・整序されたかたち



でまとめなおしたいと考えている<sup>(4)</sup>。

なお、当初の予定では、カール・キンダーマンの転出とエドガル・ヤッフエの招聘(1906年)、カール・ラートゲンの転出とアルフレート・ヴェーバーの招聘(1907年)、ゲオルク・ジンメル招聘運動などにも触れる予定であった。それらについても、残された問題群とともに他日を期すことにしたい。

(完)

〔注〕

- (1) こうした不備は、彼女の記述が要をえず、文脈や時期が無意味に前後して錯綜していることともかわって、多くの誤読・誤認を招いている。たとえば、ラートゲンがヴェーバーの後任でなく新設の第二教授ポストに就任したことは、彼女の記述をよく読むとわかるのだが(LB 1: 254–255, LB 2: 277)、彼女はこうした単純な事実関係をすっきりと書くことができていないため、読者をいたずらに混乱させている。ラートゲンの孫バルトルト・C・ヴィッテは、マリアンネの本を読んでいたにもかかわらず、筆者がこの事実を告げるまで、自分の祖父はヴェーバーの後任だと思いこんでいた。学生時代から歴史研究やヴェーバー研究に勤しんできたヴィッテのような標準以上の読書力を有するドイツ人であっても、マリアンネの本だけを読むと誤認が生じるのである。こうした文脈の混乱・錯綜は、彼女が、何人かの助言者の意見を容れて加筆を繰り返すうちに生じたもののようにも思われる。
- (2) 安藤英治による聴き取り調査のなかで、幾人かのインフォーマントは、マリアンネの伝記記述にたいしてあからさまな不快感を表明している。エドガー・ザリーンは、彼女が学問的な話題についていくことができなかったことを指摘しており、ヘルムート・プレスナーは、第一次世界大戦にたいするヴェーバーの見解に彼女が金メッキを施したと評している。ヴィルヘルム・シュティヒヴェーにいたっては、多くの点でマリアンネと意見を異にしており、読んで憤慨し、その後二度と読まなかったという(亀嶋庸一編 2005: 91–92, 120, 60–61)。こうした問題ともかわって、マリアンネが、この伝記を執筆している時点の時代状況のなかで、いかなる執筆動機をもっていかなるヴェーバー像を提示しようとしたのかにかんする内在的批判——つまり一種のマリアンネ研究——も必要であろう。これは本稿ではなしえなかったことである。
- (3) ただし、彼女が伝記中に引用している書簡は貴重な史料である。もっとも、なかには、日付を欠いていたり、彼女が判読できなかった部分が端折られていたり、つまみ食いのな引用だったりするケースもみうけられるから、それがヴェーバーの真意をどの程度正確に伝えているのかについては慎重な吟味がつねに必要である。
- (4) 筆者は、2008年3月現在で、ベルリン大学・フライブルク大学・ヴィーン大学・ミュンヘン大学における史料調査をおこなっていない。前二者にかんしては、これまでプロイセン枢密公文書館・カールスルーエ総合公文書館における政府側内部史料調査によって補うことができたが、本稿をまとめなおすさいには、後二者にかんしても調査が必要になるかもしれない。もっとも、在外研究の課題はあくまでもラートゲン研究なので、それと係わりをもつかぎりでの調査に限定されるが<sup>5</sup>。

〔史料・文献〕

Drüll, D. 1986: *Heidelberger Gelehrtenlexikon 1803–1932*. Berlin: Springer

Frye, B. B. 1967: A letter from Max Weber. *The Journal of Modern History*, 39(1)

Honigshheim, P. 1963: Erinnerungen an Max Weber. *Kölner Zeitschrift für Soziologie und*

- Sozialpsychologie*, 15. 大林信治訳 1972『マックス・ウェーバーの思い出』みすず書房
- LB 1: Weber, Marianne 1926: *Max Weber; Ein Lebensbild*, 1. Aufl. Tübingen: J. C. B. Mohr (Paul Siebeck)
- LB 2: Weber, Marianne 1926/50: *Max Weber; Ein Lebensbild*, 2. Aufl. Heidelberg: Schneider. 大久保和郎訳 1963『マックス・ウェーバー』みすず書房
- Lepsius, M. R. 1977: *Max Weber in München; Rede anlässlich der Enthüllung einer Gedenktafel. Zeitschrift für Soziologie*, Jg. 6, Heft 1.
- Rubner, H. (Hrsg.) 1978: *Adolph Wagner; Briefe, Dokumente, Augenzeugenberichte 1851–1917*. Berlin: Duncker & Humblot
- 上山安敏・三吉敏博・西村稔編訳 1979『ウェーバーの大学論』木鐸社
- 折原浩 2003「マックス・ヴェーバーにおける社会学の生成（1） 1903～07 年期の学問構想と方法」神戸大学社会学研究会『社会学雑誌』20
- 折原浩 2007『マックス・ヴェーバーにとって社会学とは何か——歴史研究への基礎的予備学——』勁草書房
- 亀嶋庸一編（今野元訳） 2005『回想のマックス・ウェーバー——同時代人の証言——』岩波書店
- 住谷一彦 1974「マックス・ヴェーバー「農政学講義」ノート——1897・98 年ハイデルベルク大学の講義筆記草稿について——」『立教経済学研究』28-3・4
- 住谷一彦 1985「マックス・ヴェーバーの『国家社会学』——1920 年ミュンヘン大学夏学期講義手稿によせて——」住谷他編『ドイツ国民経済の史的研究——フリードリヒ・リストからマックス・ヴェーバーへ——』御茶の水書房
- 野崎敏郎 2005『カール・ラートゲンの日本社会論と日独の近代化構造に関する研究』（科研報告書）
- 橋本昭一 1975「人と思想 ブルーノ・ヒルデブラント」民社党本部教宣局『革新』58

#### 〔付記〕

本稿は、平成 18-19 年度科学研究費（基盤研究(C)(2)）の助成を受けた個人研究の成果の一部である。手稿類の探索およびその判読のためにご助力を賜った各公文書館のスタッフの方々に深謝する。

（のぎき としろう 公共政策学科）  
2008 年 4 月 10 日受理